

平成 27 年 12 月 24 日

## 南スーダン内戦傷病者救援

国際医療救援部 渡瀬 淳一郎



南スーダンに入って、1ヶ月余りがたちました。首都のジュバにいます。こちらは日増しに暑く乾いてきています。

今回派遣されているミッションは、赤十字国際委員会（ICRC）の事業で、内戦中の南スーダンの戦争被害者に対する救済活動の一部である医療救援活動です。

今、ジュバにある陸軍病院の一角を間借りした ICRC の施設で、外科医として働いています。ここでは入院患者が約 40 名いますが、そのほとんどが軍人、

民間人を問わず銃創で運ばれてきた患者さんです。銃創患者の傷の特徴は、なんといっても外の傷の割に中のダメージがひどいことに尽きます。そのため、初回の手術では傷を大きく開き、血行不良となり汚染された組織を十分取り除くことが求められます。そして初回で傷を閉じることは決してせず、多くは 5 日を経て再度、手術室で開けた際の創の様子で傷を閉じるかどうかを判断します。四肢外傷が圧倒的で、骨片が粉碎されているケースは相当難渋しますし、腹部に 1 発でも入っていると、刺創以上に損傷部位の検索や処置方法に気を遣います。また、たいていの症例は受傷後、時間が経過しているため感染を合併しています。

いわゆる、戦傷外科の知識と経験が求められる世界です。

内戦の終わる気配がなく先が見えない中で、次から次に運ばれてくる傷ついた人の手当をしていると、戦争はあかんあと、ほとほと思います。弾丸を人の体に打ちこむのは簡単ですが、治すのは大変です。私はこれまで刺創症例は色々見てきましたが、銃創は過去に 1 回見たきりでしたので、今回の 1 例、1 例が非常に大きな経験となっています。



我々のチームは外科医、麻酔科医、複数の手術看護師（器械を術者に手渡すだけでなく手術の助手もする）、病棟看護師からなります。今はドイツ、フランス、カナダ、ヨルダン、フィンランド、イギリス、ポルトガル、ジンバブエから来た人たちと仕事をしています。色んな訛りの入った英語が飛び交うので、聞き取るのが大変です。まあ人のことは言えませんが。

大きな事業の流れの中で、自分に与えられた期間の責務を全うし、全体として少しでも傷ついた人の支えになれば本望です。